

## 「バリアフリー能サポート研究会」レポート

令和8年3月

### 趣旨:

横浜能楽堂では2000年より、障がいの有無にかかわらず様々な方が一緒に能楽を楽しめる公演「バリアフリー能」を毎年開催してきました。立ち上げより約四半世紀経ち、改めてサポートの見直しを行い、より「自分らしく楽しめる」サポートをつくるため、外部より有識者を招き、研究会を実施します。

今回は、その中でも「音声ガイド」を取り上げ、障がい当事者が「自分らしく楽しめる」ガイドを探ります。

### メンバー:

三ツ木 紀英 (アート・エデュケーター/NPO 法人芸術資源開発機構 代表理事)

原 瑠璃彦 (能狂言研究者/静岡大学准教授)

横浜能楽堂 職員 6名

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 職員 6名

モニター: 視覚障がい当事者

鳥居秀和 (音声ガイドディスクライバー/株式会社音声ガイドット取締役会長)

ファシリテーター: 青木 将幸 (ファシリテーター/青木将幸ファシリテーター事務所)

### 日程:

第1回 4月20日(日) 14:00~17:00 場所: BUKATSUDO HALL

第2回 4月21日(月) 9:00~12:00 場所: BUKATSUDO HALL

第3回 6月2日(月) 14:00~17:00 オンライン開催

第4回 7月14日(月) 14:00~17:00 オンライン開催

第5回 10月6日(月) 14:00~17:00 場所: BUKATSUDO HALL

第6回 11月17日(月) 14:00~17:00 場所: BUKATSUDO HALL

### 方法:

2023年3月21日開催の「バリアフリー能」で上演した狂言「首引」、能「熊坂」の映像に合わせ、ワークショップ形式で実際に音声ガイドを作成する。その際、事前解説部分も実際に公演をする想定で、原稿を作成することで、音声ガイドと事前解説の役割分担についても分かりやすい方法を探る。そこから能狂言における音声ガイドおよび事前解説の方針を定め、事例を蓄積する。

### 主催

横浜能楽堂 (公益財団法人横浜市芸術文化振興財団)

## プロセス:

### 1) 「能楽」の共有

バリアフリー能サポート研究会第1回は、参加者の自己紹介を交えながらそれぞれにとっての「私と能」について話し、参加者それぞれの能との出会いや、印象を共有した。



### 2) 「能を鑑賞するとはどういうことか」レクチャー

その後、原瑠璃彦氏より「能を鑑賞するとはどういうことか」についてレクチャーを受けることで、能と観客の関係性について参加者みんなで共有した。

例えば、能の切り口の多様性や、観客が主体的・積極的に想像することによって成立する芸能であることなどについて確認した。



### 3) 「バリアフリー能」サポートの変遷と課題

第2回では、冒頭で横浜能楽堂職員より「バリアフリー能」で実施したサポートの変遷と今抱えている課題について、写真や実物を使いながら説明をした。

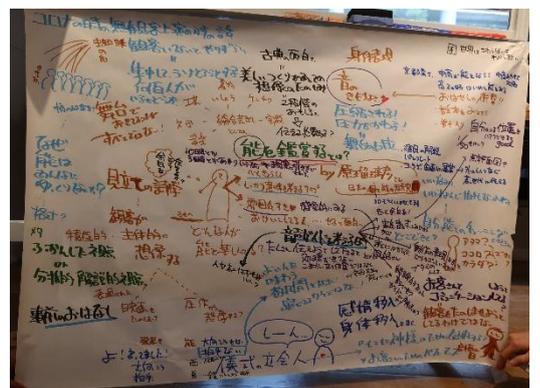
特に、今回取り上げる音声ガイドについては、ソフト部分について掘り下げができていない点について、課題意識を持ち続けていた旨を共有、また鑑賞体験をより深めるために公演後に開催した感想シェア会についての方法についても課題として挙げた。



### 3) 既存の音声ガイドについての意見

その後、【字幕・音声ガイド付き】普及公演「バリアフリー能」(2023年3月21日開催)を見た感想、意見を参加者で共有した。

その中で、能・狂言そのものに関する俯瞰的な解説や演目に関する俯瞰的な解説の必要性、情報の優先順位、専門用語の使用など、課題を共有した。



#### 4) 音声ガイドの作成

第3回・4回では、ワークショップ形式で、公演の事前解説の作成、音声ガイドの作成を実施した。3グループに分かれ、実際に普及公演「バリアフリー能」(2023年3月21日開催)の映像に合わせる形で、能「熊坂」の一部分ずつの音声ガイドの作成を試みた。オンライン上で、事前解説と、映像に合わせた音声ガイドを発表し、それに対する意見の交換を行った。

#### 5) 当事者からのフィードバック

第3回・第4回で意見交換しながら作成した能「熊坂」の音声ガイドの映像を作成し、視覚障がい当事者および音声ガイドのディスクリバーに視聴いただいた。第5回では、当事者およびディスクリバーからのフィードバックをもらい、意見交換を行った。

また、これまでの意見交換の蓄積を基に、狂言「首引」の音声ガイドも分担し作成を行った。第6回では狂言「首引」について、当事者も交え、参加者で意見交換を行った。



## 成果:

本研究会で、能楽研究者・インクルーシブ・音声ガイドなど、様々な分野の専門家との議論・対話を通して、成果として、以下の2点を得ることができた。

1. 今後の音声ガイドの方針の作成
2. インクルーシブ人材の育成

### 成果1:音声ガイドの方針の作成

本研究会を通して、「バリアフリー能」のサポートである音声ガイド作成にあたり、今後の方針を以下のように定めることができた。

#### 1. 能狂言・能舞台解説

対象：視覚に障がいのある方、聴覚に障がいのある方ほか観客のすべてにむけて

目的：視覚に障がいのある方が頭の中に能舞台のランドスケープを描けるようにする。そうでない方も、能舞台の基本的な事項について理解を促す。

方針：

##### 1) 能と狂言について

- ・簡単な歴史など

##### 2) 能舞台について

- ・舞台に対して自分が座っている位置を、能舞台の触図を使って、同行者と確認する。
- ・必要な位置と言葉(本舞台、橋掛り、一の松・二の松・三の松、揚げ幕、鏡板)を説明。その場所に解説者が移動し、話すことで、空間や位置を把握できるようにする。
- ・能楽堂の特徴として、本来能舞台は野外にあり、屋根付きの建物がそのままあること
- ・指示代名詞はできるだけ使わない
- ・長さや高さなど大きさをおおよそで伝える
- ・視覚的な要素—色(揚げ幕)や特徴(遠近法)—も可能な限り伝える

#### 2. 能狂言の演目解説

対象：視覚に障がいのある方、聴覚に障がいのある方ほか観客のすべてにむけて

目的：上演が始まったら、舞台上の音と音声ガイドによって狂言や能の世界にはいれるように、事前に舞台上の物語の内容と登場人物、その見どころを把握する。(能については囃子方や地謡の配置も)

方針：

- ・曲目のあらすじを説明する。シテ・ワキ・アイ・アドとその役割は、登場する場面と共に説明。
- ・主要な演者である、シテ・ワキ・アイ・アドの呼び方はここで確定し、音声ガイドでも踏襲する。
- ・視覚的な要素—演者の面や衣装なども加えながら、視覚的にイメージが湧くように粗筋を説明する。

- ・指示代名詞はできるだけ使わない

(能のみ)

- ・はじめに、演者と人数と役割を説明。囃子方（笛、小鼓、大鼓、太鼓）と地謡といった人たちがどこに座るか、解説者がその位置に移動し説明する。どこから音や声を出しているのか、舞台上の配置が把握できるようにする。
- ・あらすじを説明しながら、能を鑑賞する上で知っておくべきことを伝える。
  - 1) 前半+アイによる物語の説明+後半という大きな構造がある
  - 2) 舞台美術はなく、能とは観客がイメージすることで成立する

### 3. 能の音声ガイド

対象：視覚に障がいのある方

目的：能はオペラのような総合芸術である。能の物語世界に入り込めるようにするには、その人なりに情景を思い浮かべる必要がある。まずは物語についていけるように謡や地謡が語る物語を現代の言葉で伝える。加えて、演者の動きとその意味や位置、能の演出の特徴についても伝えることで、舞台上での動きの想像を可能にしたい。

ポイント：

- ・能の始まる直前に、(解説で一度話をしていけるが) 再度想像力を働かせて鑑賞してほしい旨を伝える。
- ・ガイドの説明のタイミングは、地謡や謡や演奏に重ならないようにしながら現在進行形で伝える。次に起こることや謡われることを、直前に簡潔に説明すると、情景が想像しやすい。

→事例1

- ・謡や囃子の演奏も能の魅力であるため、できるだけガイドの声が重ならないよう心がける。謡の内容をすべてを伝えるのではなく、必要な部分を伝える。またできるだけ簡潔な説明に。
- ・ガイドの説明は少なく、邪魔をしないようにしたいが、実際は初心者が聞き取れる内容は、専門家が思うほど多くないと考えた方がよい。観客が耳だけで聞き取れるであろう水準は少し低めに見積もり、詞章の内容や状況を説明する。
- ・演者の所作は意味がある型と意味のない型がある。重要な所作は、意味を含めて説明する。(意味の説明なしに所作だけを説明すると、動きをイメージするのは難しく、正しくイメージしなくてはならないような気持ちになるので、所作だけを説明するのは避ける)

→事例2

- ・演者の所作や佇まいについて客観的な言葉だけでなく、主観的な表現を含めて説明する。客観的な言葉のみの場合、状況の把握しかできず、主観的な言葉があることで、全体の雰囲気把握することが可能になることがある。

→事例3

- ・限られた時間のなかで、物語の内容と演者の動きとどちらかを優先しなくてはいけないときは、謡の説明を優先する。

→事例4

- ・能の専門用語は説明なしでは使わない。ただし、能の用語の響きに、能らしさも感じるので、覚えておくことと今後の能鑑賞に役立つ、あるいはこの演目にとって重要なものは、補足説明をいれ

てその言葉を使う。

→事例5

- ・ 演者の位置の説明は、平易な言葉で説明する。クロックポジションも直感的にイメージできないので使わない。(シテ柱、目付柱といった用語を事前に説明したうえで使用することも検討したが、柱で説明することで、どのあたりにいるのかもうまく伝わらないことや、初心者には身につけていないことも考慮し、使用しないことにした。)
- ・ 演者目線ではなく、観客目線の言葉使いにする。例えば「橋がかりを進んでいきます」ではなく「進んで来ます」。
- ・ しばらくの間、演奏や掛け合いが続き、ガイドなしで味わって欲しい場合は、その旨を伝える。ガイドなしで、不安になる時間を作らない。

→事例6

### 3. 狂言の音声ガイド

対象：視覚に障がいのある方

目的：能と比較して、動きも台詞も多いため、ガイドの説明の量に比して、ガイドを入れることができるタイミングが少なくなるが、狂言の台詞はできる限り活かしながら伝える。また、狂言は喜劇でもあるため、笑うタイミングがずれないように、できるだけ健聴者と同じタイミングで伝える。

ポイント：

- ・ ガイドの説明のタイミングは、台詞に重ならないようにしながら現在進行形で伝える。
- ・ 音・台詞から理解ができる部分については、省略してできるだけ簡潔な説明にする。  
→事例7
- ・ 動きを説明する時には、先にイメージしやすい大きな動きを、その後細かな動きを説明する。  
→事例8
- ・ 台詞は能と比べ分かりやすいが、理解しづらい場合は、内容の説明をする。

事例1)

次第

ワキ♪「うしとはいいて 捨つる身の うしとはいいて 捨つる身の 行方やいつと 定むらん」

冒頭が古語の歌のため、最初は直前に説明があったほうが聞けるのではないかと考え、先に「うしと  
はいいて 捨つる身の 行方やいつと 定むらん」と該当部分を示した後、「『この世がつらく、出家  
したが、これからどう生きていけばよいのだろう』と歌います。」と説明を加えることとした。

事例2)

ノリ地

シテ♪「いつしかに

地謡♪「月は出でても 朧夜なるべし

「熊坂は一度後ろに下がった後、前に少し歩みを進め、長刀を(「ドン」と)床に突き」を入れていた  
が、この動きについては、あまり意味合いのない動きのため、省略し、「そして前に向きなおり、もう  
一度長刀を前に下ろします。」のみ動きを説明することとした。

事例3)

<シテ熊坂の出>

描写を完全に客観的なものにする、味気ないものになってしまうため、

「熊坂は目をカッと見開いたような能面をつけ長刀を右肩にかつぎ、黒地に金色の大きな文様の入った  
頭巾や装束をつけ、豪快な様子です。」と、ある程度主観的な描写を入れた形とした。

事例4)

ノリ地

追っ駆けおつ詰め とらんとすれども 陽炎稲妻水の月かや

姿は見れども 手に取られず

初めの案では動きの説明として「さらに牛若を捉えようと、あちらに跪き、こちらに跪きとらえよう  
としますが、とらえることはできず、牛若の姿を見失ってしまいます。」とすることを考えていたが、  
それ以前に「両手を前に、大きく広げ、牛若を生け取りにしようと舞台の上をあちらこちらへと動き回  
ります。」と前半はほぼ同じ描写のガイドを入れているため、謡を聞いてもらうことを優先した。

「とらえることはできず、牛若の姿を見失ってしまいます。」のみガイドをすることとした。

事例5)

<アイ所の者の出>

「肩衣と呼ばれる黒いベストのような着物を着ています。」と肩衣という言葉を使いつつ、黒いベスト  
のような着物と説明を加える。

事例6)

<出端>

囃子の始まる頃、「ここから何者かがこれから登場する、その予兆の演奏が始まります。」の後、囃子が

長く続くため、2分程度経った後に「演奏はさらに続きます。」と安心して演奏を聞けるようガイドを入れることとした。

事例 7)

<シテ（親鬼）の出>

アド（鎮西八郎為朝）

「某天下に恐ろしいと存ずる事はないによって、昼夜難所を厭わず歩く事でごぞる。

シテ（親鬼）

「人臭い、人臭い。これは何者か参ったそうな。にわかに入臭うなった。

の重白部分

重白がある場合、ガイドも入れると聞き取れないため、できるだけガイドを省略。「突然、揚幕が上がり、鬼が現れます。」と動きの説明を入れていたが、「人臭い」の台詞で、鬼が現れたことは分かるため、あえて何も言わず、台詞を聞かせる。

事例 8)

<道行>

アド（鎮西八郎為朝）

「鎮西八郎為朝でごぞる。それがし、子細あつて西国に罷りあつたが、このたび上方へ上ろうと存ずる。まずそろりそろりと参ろう。

「本舞台の縁を、舞台左奥から左手前へ、左手前から右手前へと移動します」としていたが、先にイメージしやすい大きな動きを、その後現状の動きを聞いた方がわかり易いため、「本舞台の縁をぐるっと一周します。左手前、右手前へと移動します。」とした。なお、大きな動きだけではなく、想像を助けるような具体的な所作も説明する。

## 成果2:インクルーシブ人材の育成

本研究会に参加した職員は、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団の職員の中から、横浜能楽堂・横浜みなとみらいホール・横浜にぎわい座・経営企画・ACYグループの職員の参加があった。それぞれインクルーシブ分野における知識や経験値、立場の異なる職員であったが、それぞれが必要な知識や意識を得ることができた。

今後、今回の研究会で得た知識や意識をもって、それぞれの施設や事業、担当業務に応じ、障がいのある方に向けたサポートをつくっていく人材、インクルーシブ事業を担っていく人材となっていくことを期待したい。

### 参加者の声

- ・「お客様が何を求めているか」を改めて考え直し、実際にどう提供していけるかということを考えるプロセスは、ほか事業にも共通する重要なことだと再認識できました。
- ・聴覚に障がいのある方や、その支援の最前線にいる方のお話を直接うかがえたことがとても有益でした。これまで気づいていなかった前提や、無意識の思い込みに気づかされる場面が多く、自分のわかったつもりが揺さぶられる貴重な機会でした。
- ・「音声ガイド」という枠にとどまらず、視覚障害の方に何かを説明する際の言葉の選び方や順序、考え方について学びが多かったと思います。
- ・結果だけではなく、検討の経緯を知ることができたため、自身の事業への反映を検討し易かった。
- ・言葉遣いや言葉の時制など、細かい工夫点を学ぶことが出来てとても有意義だった。そもそも、音声ガイドの多面的な部分（能、音声ガイドのシステム、インクルーシブ）それぞれの専門家がかかわったことで、様々な角度から気づきを得ることが出来た。